

発刊のあいさつ

浦添市教育委員会教育長 保久村 昌 伸

浦添市教育委員会は、一九八七年度（昭和六十二年度）に『琉球王国評定所文書』第一巻を刊行し、昨年度までに既に七巻を刊行しております。これまで琉球王国の近世史にとつて重要な文書であるという高い評価を得ながらも、同文書は断片的にしか翻刻出版されませんでした。当教育委員会では、現在確認されている全史料を『琉球王国評定所文書』全十八巻として刊行する予定です。

浦添市は、歴史的には「うらおそい」の言葉にも示されるように、沖縄本島の政治の拠点として栄え、特に大交易時代と称される時期には中国等とも貿易を行っていました。このような「国際性ゆたかな文化都市」をめざす文化事業の一環として「琉球王国評定所文書」刊行事業を推進しております。

本事業が琉球・沖縄歴史の研究の発展にいささかなりとも貢献することになれば、これに過ぎる喜びはありません。本事業の遂行にあたっては、新たな史料発掘作業を始めとして幾多の困難が予想されますが、各位の従前にまさるご理解とご協力によって、その完遂を期したいと決意しています。

『琉球王国評定所文書』第八巻には内務省で作られた『旧琉球藩評定所書類目録』の通し番号に従って、一五一〇号～一五一三号までの文書を収録しました。年代は、一八五三年（咸豊三）～一八五四年（咸豊四）の二年間ですが、この時期はペリーの来航を始めとして、ベッテルハイムの滞在の最後の時期であり、またロバート・バウンソン事件等、

対外関係の問題の非常に多かつた時期です。そのために、一五一三号のような亜人関係の日記は勿論、一五一〇号にみられるように、進貢船で中国へ遣わされる使節も、異国関係の処理のために中国官僚との折衝を行わねばならなかつたのです。

また、『琉球王国評定所文書』第八巻には、これまでの東京大学法制史資料室所蔵本に加えて、一九八六年に警察庁倉庫から発見され、現在国立公文書館に移管所蔵されている評定所文書二十一件の中から、始めて翻刻刊行されています。それは一五二二号文書で、「案書」という文書形式のもので、幕末の琉球の外交関係のみでなく、その内政部分についても興味深い内容の文書が含まれています。このように、総合的に当時の琉球を考えるためには、まさに最適の史料だと考えられます。多くの市民をはじめ、研究者の間で広く活用されることを願っています。

最後に、本事業のために貴重な資料を提供し、また、刊行について御快諾下さいました東京大学法学部法制史資料室並びに国立公文書館の関係各位、また、史料の筆耕解説にご協力下さいました研究者各位に深く感謝申し上げます、発刊の言葉と致します。

一九九二年（平成三）三月吉日